第四章　竹嶋記事・史料翻刻（抜粋）

以下では、先に示した綱文一覧の整理番号のうち**001・002**、**303～305**、**401～407**、**501～510**を抜粋翻刻した。本来和文史料であるものを横書きで提示している点や、一つ書きの位置等が整序されておらず、読みにくさや利用のしにくさなど様々な不備がある。全文翻刻でない点や異本との校合等を含め、別の機会を得て改善に努めたい。

001竹嶋記事序

竹嶋の事、元禄癸酉の年に始りて同己卯の年に畢れり、其の間前後七年をへしなり、然も此の事いまた其の記録せしあらさるによりて、此年越克明をして此の編をあらはさしむ、大抵此の始末其年の久しきを閲たりしゆへ、いはゆる事機の変既に多端にして、またもつてかの考に備ふへき、翃に一二ならす、克明能くために心を謁して此の編を成してまた間其の所見を附しもつて鑿を他日に存せしものなり、ねかはくは覧る人の能くこれを察して徒に記録をもつて例して視ることなからむことを、夫竹嶋の事これより先き　萬松院公の御時にありてかつて論難ありし、子細善隣通書に見へしもの、また予か著すところの朝鮮通交大紀に論し及しぬ、宜しく此の編に参へ見るへし、今此のあめる克明の心を用ゆるおふくたならさるをおもひて姑くこれか梗概を序して、もつて後の人に告く、其の事の洋なるかことき は覧る人能くこれを此編に尽さむ　時

享保十一丙午朧月　日　　松浦儀右衛門允任題

002竹嶋記事編集之凡例

一竹嶋之一件、元禄六癸酉年ニ始り同十二丁卯年ニ終り候得共、其砌御記録編集無之候付、享保十一甲午年御記録被仰付候処、参判使両度之記録も脱簡等在之、江戸・朝鮮往復之書状も連続不仕、其上三十年を経候事故御帳面も虫損ニ及全備不致候故、諸帳面を考合相知レ候分を以編集仕候事、

一数百枚之御記録故、書キ続ケニ仕候而ハ御考之節難見分ヶ候故、一段之大綱を二三字高ク書載仕、其次ニ二三字下ヶ条書ニ微細なる儀を書載仕り、一段敷段を分ヶ申候事、

付り、条書之分者、状扣・日帳等之文句を大方其侭用イ置候事、

一事実之始末見分ヶ安ク候様ニ編集仕候故、往復書状之内より考出候儀者書状之文句を少ツヽ相改記録言葉ニ直シ書載仕、書状を載セ不申候而難罷成所ハ書状之略を記し、全文ハ載セ不申事、

一此一件前後七年之間ニ而御国三代ニ及ひ御称号紛敷、殊数年之後編集仕候儀故御称号を書載仕候所ニハ何も御院号を相用候事、

一御書簡往復書載セ候所ハ輪番書稿之内より書抜載之、尤全篇者輪番書稿ニ詳ニ書載在之候故、別副者相省置候事、

付り、大差再度之返簡者論番書稿ニ無之候故、多田与左衛門日帳之内より書抜候、尤別副者日帳ニ相見江不申候事、

一御奉書并御老中江之御連状・御口上書・長崎御奉行等江之御状其外御使者等之被仰渡候御書付・御使者伺公等之類者、何も全文を書載候事、

一真文之書キ物ハ、何も全文を載セ候得共、短簡・扣等紛失之類ハ其所ニ晶紙を残し置、重而考出候人有之時書載セ可申事、

一此御記録編集之始末、天龍院公御実録之次第を以て相考候事、

一杉村采女大差被仰付候事者御帳面之趣不詳候故、采女自分之覚書を以書載セ候事、

一因州江朝鮮人罷越候次第御記録不相見候故、江戸表取扱之儀者大浦忠左衛門自分之覚書を以記之、因州江之御使者一件者鈴木権平覚書を以書載仕候事、

右之例を以編集仕候得共、御帳面等全備不仕候故、委細成事を難考出事も在之、極而事実之脱漏も可在之候間、重而幾度も校合被仰付、増補被遊候様ニと奉存候事、

享保十一甲午年朧月　日

編集　越常右衛門

執筆　大浦陸右衛門

此書の編を成セし後、雨森東五郎等の事の始末を知れるによりて、東五郎に仰せて訂補せしめられしや

303

○丙子元禄九年正月廿八日、天龍院公御登城、御暇御拝領被遊候上、於御白書院御老中御四人御列座ニ而、戸田山城守様竹嶋之儀ニ付御覚書一通御渡被成、先年以来伯州米子之町人両人竹嶋江罷越致漁候所、朝鮮人も彼嶋江参致漁、日本人入交り無益之事ニ候間、向後米子之町人渡海之儀被差留候と之御儀被仰渡也、

303—1

△是より前正月九日、三沢吉左衛門方より直右衛門儀御用ニ付罷り出候様ニと之御儀ニ付参上仕候処、豊後守様御逢被成、御直ニ被仰聞候者、竹嶋之儀中間衆出羽守殿・右京大夫殿江も遂内談候、竹嶋元しかと不相知事ニ候、伯耆より渡り漁いたし来る由ニ付松平伯耆守殿へ相尋候処、因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之候、米子町人両人先年之通り船相渡度之由願出候故、其時之領主松平新太郎殿より案内有之、如已前渡海仕候様ニ新太郎殿江以奉書申遣候、酒井雅楽頭殿・土井大炊頭殿・井上主計頭殿・永井信濃守殿連判ニ候故考見候得者、大形台徳院様御代ニ而も可有之哉と存候、先年と有之候得共其年数者不相知候、右之首尾ニ而罷渡り漁仕来候迄ニ而朝鮮之嶋を日本江取候と申ニ而も無之、日本人居住不仕候、道程之儀相尋候得者、伯耆よりハ百六拾里程有之、朝鮮江者四十里程有之由ニ候、然者朝鮮国之鬱陵島ニ而も可有之候哉、夫共ニ日本人居住仕候か此方江取候証拠等も無之候間、此方より構不申候様ニ被成如何可有之候哉、又者対馬守殿より鬱陵島と書入候儀差除返簡仕候様ニ被仰遣、返事無之内対馬殿死去ニ候故右之返簡彼国江差置之たる由ニ候、左候得者、刑部殿より鬱陵島之儀被仰越候ニ及申間敷歟、又ハとかく竹嶋之儀ニ付一通り刑部殿より書簡ニ而も可被差越と思召候哉、右三様之御了簡被成、思召寄委可被仰聞候、蛇取ニ参候迄ニ而無益嶋ニ候処、此儀むすほられ年来之通交絶申候も如何ニ候、御威光或武威を以申勝ニいたし候而も、筋もなき事申募候儀者不入事ニ候、竹嶋之儀元しかと不仕事ニ候、例年不参候異国人罷渡候故重而不罷越候様ニ被申渡候様ニと相模守殿より被申渡

候、元ばつといたしたる事ニ候、無益儀ニ事おもくれ候而も如何存候、刑部殿ニ者御律儀ニ候間、始如此申置候処今更ヶ様ニ者被申間敷と之御遠慮も可有之かと存候、其段者少も不苦候、我等宜様ニ了簡可仕候間、思召之通無遠慮可被仰聞候、其方達も存寄無遠慮可被申候、同し事を幾度も申進候段くとき様ニ候得共、異国江申遣事ニ候故、度々存寄申進候間、思召寄幾度も被仰聞候様ニと存候御事繁内ニ候故、今少筋道をも仕候上ニ而達上聞可申と存候、右申渡候口上之趣其方覚之為ニ書付遣之候と之御事ニ而御覚書御直ニ御渡被成候故、請取拝見仕候而、只今之御意之趣有増落着申候様ニ奉存候、左候ハヽ以来日本人ハ彼嶋江御渡被遊間敷と之思召ニ候哉と伺申候得者、如何ニも其通ニ候、重而日本人不罷渡候様ニと思召候由御意被成候故、竹嶋之儀返し被遣候と申すてにはニ而も無御座候哉と申上候得者、其段も其通ニ候、元取候嶋ニ而無之上ハ返し候と申筋ニ而も無之候、此方より構不申已前ニ候、此方より誤りニ而候共不被申事ニ候、右被仰遣候趣とハ少しくい違候得共、おもくれ可申より少しハくい違候共軽く相済申候方宜候間、此段御了簡被成候様ニと之御事故、とくと落着申候、罷帰刑部大輔江可申聞由申上候而退座仕ル、

303—2

△豊後守様より御渡被成候御書付左ニ記之、

口上覚

旧冬覚書を以被仰聞候旨、各ト委細申達候

一竹嶋之儀松平伯耆守へ相尋候処、竹嶋者因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之、米子之町人両人願出、松平新太郎因幡・伯耆領知之時分窺有之而、竹嶋江米子町人相越猟いたし来ル由ニ候、然者朝鮮国之嶋を日本江取候と申わけニも不相聞候、道程之儀承候得者、竹嶋より朝鮮江凡四十里余程、伯耆江者百六十里程在之由ニ候、朝鮮江者各別程近候故朝鮮国之堺鬱陵島ニ而も可有之哉と被存候、夫共ニ日本江取候慥成しるしも在之候か又日本人居住等仕候者、今更朝鮮江難遣事ニも候得共、左様之儀も前々弥無之者、此方より竹嶋之儀構無之わけニ仕可然哉之事、

一対馬殿より朝鮮江鬱陵島と書入候儀差除返翰被越候様ニと被相達候処、返簡披見無之内対馬殿死去候、然者刑部殿より鬱陵島之儀重而被申越不及被差置苦ヶ間敷哉之事、

一竹嶋鬱陵島之儀ニ付、兎角一通り刑部殿より書通被致度被存候哉之事、

右御了簡候而、無遠慮可被仰聞候、以上、

正月九日

303—3

△同月十一日、豊後守様江直右衛門参上、思召寄之書付二通三沢吉左衛門を以差上口上ニ而申上候者、一昨日者竹嶋之儀ニ付家来被召寄御逢被遊被仰聞候趣委細致承知奉得其意候、依之存寄之通書付懸御目今少シ宜敷いたし方も可有之事ニ奉存候得共、異国江申遣事ニ候故、存候侭ニ不参おもくれ候而者思召等も相違仕候事、軽く相済候様ニと被思召候と推察仕候故、其思召を請候而存寄書付差上申候、此段十分之いたし様とハ不奉存候、まげるのいたし様ニ而御座候、先日懸御目候通対馬守方より以書簡急度申掛置候処、今度之書簡之通申遣候而者少くい違申気味御座候故如何ニ存候得共、夫共ニまげるニいたし候了簡

ニ御座候、此上又思召も御座候ハヽ何ヶ度も被仰聞被下候様ニ、又了簡之趣をも可得貴慮候由申上候処、則書付二通共ニ被請取被掛御目候処、被仰出候ハ、御書付之趣一段可然存候、乍然文章存寄候所家来より申付候間直し候而懸御目候様ニと之御事ニ而料紙硯書候故、如御差図書込差上之、吉左衛門被申候ハ、此儀ニ付朝鮮より書簡ニ而も可参事ニ候哉と被申候故、今度之儀存之外結構成被仰付ニ候間御礼之書簡差越申儀も可有之候、乍然口上ニ而申渡候ハヽ若書簡不参事も可有御座候、書簡差越可然被思召上候ハヽ此方より気を付可申候由申入候処、則右之段被申上候得者、御返答ニ、書付之趣一段能候間清書被仰付、明朝登場前吉左衛門方迄為持可被遣候、必持参ニ及不申候、書簡之儀者参候へかしと存候、口上ニ而被仰渡候様ニ御差図申候而者彼方江仰届候哉不被仰達候哉不相知候故、上江御覧被遊為にも御座候、其上刑部大輔様御為ニも又者豊後守為にても候間書簡参候様ニと思召候由御意之旨被申聞候故、奉畏候由申入、

303—4

△御口上書左記之、

口上之覚

竹嶋之儀因幡・伯耆ニ附属と申ニ而も無之、伯耆より渡海仕漁いたし候と申迄ニ而、朝鮮国江者道程も近く伯耆より者程遠く候故、彼国之内ニ而も可有之哉、其上日本江取候慥成しるしも無之日本人居住モ不仕候上者、御構なきわけニも被成苦ヶ間敷哉之由御尤奉存候、左様被仰付候者彼国ニも御誠信と別而忝可奉存候、乍然先頃同氏対馬守方より以書簡委申渡置たる事ニ候故、申捨ニも難仕御座候、殊此方之漁民渡海被差留候段彼国江不申届候而者如何敷奉存候、され共書簡ニ而申渡候而ハ急度ヶ間敷罷成候間、私帰国之刻者必訳官差渡申候条、其節口上ニ而申渡可然哉と奉存候、依之訳官江申渡候口上書別紙ニ相認懸御目候（朱筆）○ 以上、

（朱筆）「存寄之段御尋被成候故任仰書付差上ヶ候」

正月十一日　　宗刑部大輔

右朱書之通直し候而豊後守様江懸御目候也、

訳官江申渡候口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付以使者申達候処ニ、其節取次之人使者江被申聞候趣帰国之刻拙子江申聞候故、其趣今度於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀、元因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之、日本江取候と申事ニ而も無之空島ニ候故、伯耆より罷渡漁いたし候迄ニ候、然処近年朝鮮人罷渡入交申候故、以来殃をも仕出し可申歟と之御事~~ニ而~~~~已前之通被~~（朱筆）○（朱筆）「ニ付而最前之通対馬守方より」仰遣候得共、朝鮮国へ道程モ近~~キ~~（朱筆）○（朱筆）「く伯耆よりハ程遠キ」由ニ候間、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之御事ニ候間、御誠信之段忝可被存候、以上、

右朱書之通ニ直し候而豊後守様江懸御目候也、

303—5

△同月十二日、昨夕之御書付二通致清書上封仕、直右衛門印押之、御留守居白水杢兵衛

を以豊後守様江差上候所、曽我六郎兵衛江相渡、

口上覚

竹嶋之儀因幡・伯耆ニ附属と申ニ而も無之、伯耆より渡海仕漁いたし候と申迄ニ而、朝鮮国江者道程も近く伯耆より者程遠く候故、彼国之内ニ而も可有之哉、其上日本江取候慥成しるしも無之日本人居住モ不仕候上者、御構なきわけニも被成苦ヶ間敷哉之由御尤奉存候、左様被仰付候者彼国ニも御誠信と別而忝可奉存候、乍然先頃同氏対馬守方より以書簡委申渡置たる事ニ候故、申捨ニも難仕御座候、殊此方之漁民渡海被差留候段彼国江不申届候而者如何敷奉存候、され共書簡ニ而申渡候而ハ急度ヶ間敷罷成候、私帰国刻者必訳官差渡申候条、其節口上ニ而申渡可然哉と奉存候、依之訳官江申渡候口上書別紙ニ相認懸御目候、存寄之段御尋被成候故任仰委細書付差上申候、以上、

正月十一日　　宗刑部大輔

訳官江申渡候口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付以使者申達候処ニ、其節取次之人使者江被申聞候趣帰国之刻拙子江申聞候故、其趣今度於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀、元因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之、日本江取候と申事ニ而も無之空島ニ候故、伯耆之者罷渡漁いたし候迄ニ候、然処近年朝鮮人罷渡入交申候故、已来殃をも仕出し可申歟と之御事ニ付而最前之通対馬守方より申遣候得共、朝鮮国江道程モ近く伯耆より者程遠き由ニ候間、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之御事ニ候間、御誠信之段忝可被存候、以上、

303—6

△同月廿日、三沢吉左衛門より直右衛門方へ以手紙申来候ハ、先日訳官江刑部大輔様より被仰遣候御口上御案文之末ニ朝鮮へ程も近く伯耆より者程遠キ由ニ候間重此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之御事候間、御誠信之段忝可被存候、已上、右之通在之候、あなたよりハ御誠信之段忝旨御礼可在之儀候、此方より忝可被存候と被仰遣候儀、跡々も此趣ニ被仰遣候哉、いか様之時分左様ニ被仰遣候哉承度被存候、終ニ不被仰遣候ハヽ如何も可在候哉、夫共ニ不苦訳ニ候哉、其旨御老中様方御聞候時者御挨拶被申為候間、刑部大輔様思召被承度候、御窺候而明朝ニ而も明晩ニ而も御太儀なから御自分ちよと御出候様ニ豊後守被申候と之儀申来、

303—7

△同月廿一日、訳官江被仰渡候御口上両通ニ認直し、豊後守様江直右衛門持参、吉左衛門江御口上委細ニ申達候処、両通之書付被請取則懸御目、御返答ニ被仰出候ハ、被仰聞候通承届候、左候ハヽ訳官江被仰渡候口上書取替申ニ不及、右之口上書ニ而能御座候間、被申聞候御口上之趣口上書ニ仕差出候様ニと之御事ニ而料紙硯出候故、則御口上之趣書付差上之候処、一段宜候由御返答也、

訳官江申渡候口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付以使者申達候処、其節取次之人使者江被申聞候趣帰

国之刻拙子江申聞候故、其趣今度於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀、元因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之、日本江取候と申事ニ而も無之空島ニ候故、伯耆之者罷渡入交申候故、以来殃をも仕出し可申歟と之御事ニ付而最前之通対馬守方より申遣候得共、朝鮮国江道程モ近伯耆より者程遠き由ニ候間、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之御事ニ候間、此段朝廷江宜被申達候、以上、

訳官江申渡候口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付以使者申達候処ニ、其節取次之人使者ニ被申聞候趣帰国之刻拙子江申聞候故、其趣今度於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀、元因幡・伯耆江附属と申ニ而も無之、日本江取候と申事ニ而も無之空島ニ候故、伯耆之者罷渡漁いたし候迄ニ候、然処近年朝鮮人罷渡入交申候故、以来殃をも仕出し可申歟と之御事ニ付而最前之通対馬守方より申遣候得共、朝鮮国江道程モ近伯耆より者程遠き由ニ候間、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之御事ニ候御誠信を以如此候間、此段宜朝廷江可被申達候、以上、

303—8

△直右衛門口上ニ而申上候趣、即席ニ而直右衛門自筆ニ而相認、豊後守様江差上候、書付左ニ記之、

覚

訳官江申渡候口上書之内御誠信之段忝可被存候と認申候儀御尋被遊候、口上ニ而者前々もヶ様之儀訳官江者申聞候事御座候、信使之刻結構御馳走被仰付候段、朝鮮国ニも忝可被存と申儀度々挨拶仕候、書簡ニも本邦・本国なとヽ申事欠字仕候儀多御座候、上之儀なとハ謙退不仕相認候例も折々御座候、以上、

正月廿一日　　名書無之

303—9

△同月廿八日、天龍院公御登城之前、於御前首尾能御暇御拝領被遊御退出之所、大御目付仙石伯耆守様御出御用在之候間被相控候様ニと之御事ニ而、於御白書院御縁頬御老中様御四人御列座、戸田山城守様竹嶋之儀ニ付御覚書一通御渡被成、右之趣御口上ニ而も被仰渡候付、天龍院公御請被仰上候者、伯耆守方江被仰付候段朝鮮江早く被承候様ニ仕度奉存候由豊後守様江被仰達候へハ、夫とも思召寄之儀私方江可被仰聞候、此外ニも可有之と存候旨豊後守様被仰候得者、何も御挨拶ニ、諸事豊後守殿江被仰談候様ニと之御事ニ而、山城守様被仰渡候者、上意之趣ハ対馬守以前より役儀ニ念入相勤候と思召候と之御事ニ候故、天龍院公御請被仰上候者、上意之趣難有仕合奉存候、心之及丈弥念を入相勤可申と奉存候由被仰上候得者、御老中様何も被仰候ハ、難有上意ニ御座候、ヶ様ニ不被仰付候而も可被相勤儀ニ御座候と御挨拶有之候付、御礼被仰上御退出被成、

口上覚

先年より伯州米子之町人両人竹嶋江渡海至于今雖致漁候、朝鮮人も彼嶋江参致猟候由、

然者日本人入交無益之事ニ候間、向後米子之町人渡海之儀可差止旨被仰出之、松平伯耆守方ニ以奉書相達候、為心得申達候、以上

正月廿八日

303—10

△右同日、豊後守様江直右衛門参上、三沢吉左衛門江遂対面御口上申達候ハ、私儀今日者於御前首尾能被成下御暇御懇之上意蒙仰御馬拝領難有仕合奉存候、其後何も様御前ニ而も忝上意之趣被仰渡重畳可申上様も無之忝次第奉存候、一通り之御礼者遂伺公申上置候へ共、猶又此段為可申上以使者申上候、随而今日被仰渡候御書付之趣奉得其意候、依之存寄之通口上書を以申上候、弥訳官江口上を以申渡候様ニ被仰付事ニ候ハヽ、訳官渡海とかく夏中ニ者罷成申間敷候、子細者乗渡り候御船新敷造り候而其船ニ而乗渡り申候故秋末冬ニも及可申候、左候ハヽ申渡候と之御案内延引可仕候、此段も為念申上置候、将又先年者御暇之刻重而参府之儀被仰付候、今度者何之被仰渡も無御座候、当秋ニも参府之儀相伺可申候哉、今度毎より早く御暇被成下候、此御用等早く申渡候様ニ被思召上候而之御事ニ而も御座候哉、左候ハヽ来月十日前にも発足可仕候哉、若急ニ発足不仕候而も不苦候ハヽ来月中旬発足可仕奉存候、兼而如申上候致参上懸御目諸事御礼申上度奉存候、御登城之節御逢可被下候由先頃被仰聞候、何日頃可致参上候哉、御返答次第伺公可仕之由申上候処、御返答ニ被仰出候者、訳官江被仰渡候御口上書之儀者大形出来申候得共、今一偏何も江為見申候而其上相渡し可申と存控置候、重而従是御左右可申候、伯耆守殿江申渡候儀者差急不申候共之儀と存候、当秋御参府願可被仰上哉之由御尤ニ存候、乍然夫ニ者及申間敷候、先年之通ニ御心得被成可然存候、今度思召之外御暇出候付而早々御発足可被成哉之由承届候、已前ハ三月中使者も可被差渡歟之由被仰聞候故達御耳候而早速御暇出申候得共、御発足御急被成候ニ及申間敷候、来月中旬ニ而可然存候、私宅江御出之儀被仰聞候、兼而者登城之節可懸御目由申達候得共、緩々と御物語も仕候様ニ存候、祝候而料理をも進し申度候得共、其段ハ結句其元様御苦労ニも可被思召候間、夕飯過御出緩々と御語可被成候、当月者不得隙候、とかく来月中旬迄ハ余日も御座候間、従是日限可申進之由被仰聞罷帰、

口上之覚

一今日以御書付被仰渡候米子町人竹嶋へ罷渡致漁候儀被差留候と之御事、先頃如申上候訳官渡海之刻、弥口上ニ而可申渡候哉之事

一松平伯耆守江以御奉書被仰付候由被仰渡候、右如申上候訳官江申渡候様ニ被思召候ハヽ私方より訳官江申渡候と之遂御案内候以後、伯耆守江被仰付候得かしと奉存候、若渡海被差留候段流布仕候而ハ彼国ニも可伝承哉と奉存候、承候後申渡候而者如何敷奉存候故申上候、以上

正月廿八日　　宗刑部大輔

303—11

△同月廿九日、直右衛門儀、豊後守様より御用在之候間只今罷出候様ニと吉左衛門方より申来候故早速参上候処、豊後守様御逢被遊、訳官江被仰渡候口上書御渡し被成、思召寄之趣尤ニ存候、達御耳候、先日被遣候口上書、成程能候得共、不入所省候而相認申候、大

旨者違無由ニ而御読被遊候而、此通ニ候、已来殃仕出可申哉との儀抔除候、是ニ而相済申候、書役之出家之儀其外何角思召寄被仰上候趣も入不申候間、左様ニ相心得候様ニ、扨訳官渡海之儀やうたいニ船等新敷造り乗渡り候故延々ニ罷成候間、被仰渡候御案内延引可仕之由兼々中間出羽守殿江も申置候得共、猶又右之趣御認、吉左衛門迄可被遣候と被仰渡退出仕ル、

303—12

△御渡被成候御書付左記

訳官江申渡候口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付以使者申達候処、其節取次之人使者江被申聞候趣帰国之刻拙子江申聞候故、其趣今度於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀、因幡・伯耆江附属と申にても無之、日本江取候と申事ニ而も無之空島ニ候故、伯耆之者罷渡致漁候迄ニ候、然処近年朝鮮人罷渡入交申如何ニ付、最前之通対馬守方より申遣候得共、朝鮮江道程モ近く伯耆よりハ程遠き由ニ候間、重而此方之漁民渡海不仕候様可被仰付と之御事ニ候間、御誠信之段忝可被存候、以上、

303—13

△同月晦日、昨日豊後守様より直右衛門江被仰聞候御口上書、今朝直右衛門致持参、吉左衛門を以差上候所、御請取被成候由御返答被仰出、

口上之覚

竹島之儀ニ付訳官江申渡候口上書、昨夕御渡被成、委細被仰下候趣奉得其意候、訳官罷渡候儀随分差急候様ニとか申遣候得共、乗候船新敷造り罷渡候先例ニ御座候故、兎角秋之末冬ニ罷成可申と奉存候、左候ハヽ御案内可及延引候、此段為念申上置候、以上、

正月晦日　　宗刑部大輔

304

○同九年六月廿三日、於江戸御老中大久保加賀守様江此方御留守居被召呼、御直ニ被仰渡候者、朝鮮人隠岐国江罷越御代官江申聞候ハ、因幡江訴詔之儀在之候由ニ而因幡江参り候得共曽而言語通し不申候、就夫通詞之者江戸・大坂江被召置候ハヽ伯耆守殿家来方江申合せ、同然ニ早々因幡江被差越候様ニ、朝鮮人言語通し不申候付、次郎殿江者通事之事一通り之事ニ候、委細者書付を以可申達候、惣而因幡州江朝鮮人参候ハヽ長崎奉行所江差越、彼方ニ而諸事申達候様ニと御先代被仰付置候ニ付、此度も右之通因幡ニ而申付候得共承引不致候、平生之漂流人と違ひ候付、通詞之事被仰渡候と之儀也、

304—1

△六月廿三日、加賀守様御内天野与三右衛門・近藤兵太夫方より此方御留守居方へ手紙ニ而今日罷出候様ニと申来候付、御留守居鈴木半兵衛参上仕候、取次鳥居雲八江致対面、被召寄候付参上仕候由申達候処、加賀守様御前江被召出、御用之儀有之候間近く参候様ニ

と被仰候付御側江伺公仕候得者、次郎殿江加賀守申候、朝鮮人隠岐国江参、代官共江因幡江訴詔之儀有之候と申候付、其通りを隠岐国より伯耆江申越、朝鮮人伯耆江罷越、夫より因幡江参り候得共、曽而言葉通し不申候、就夫御当地・大坂ニ被差置候通事御座候ハヽ因幡江明日成共明後日成共伯耆守殿家来方迄参り、申合、一所ニ因幡江可被遣候、朝鮮人共申品通し不申候付、次郎殿江者通事之儀一通り之事ニ候、書付を以可申進と存候得共致了簡可申進と存無其儀候、明日八ツ時又々其方可被差越候、委細書付を以可申進候、惣而因幡国江朝鮮人参候ハヽ長崎奉行所江差越、彼方ニ而諸事申達候様ニと御先代より被仰付置候ニ付、此度も右之通因幡ニ而申付候得共承引不致候、常之漂流人と違、因幡江訴詔ニ参候ニ付通詞之儀申進候旨御意被成候付、半兵衛申上候ハ、御意之趣次郎江可申聞候、乍去御当地・大坂・京都ニ差置候家来共之内通詞仕候者有御座間敷と奉存候、被仰付候趣次郎ニ申聞追而可申上候由申上候、其節松平伯耆守様御留守居吉田平馬、半兵衛より先ニ加賀守様御側ニ被召出置、加賀守様平馬ニ御意被成候ハ、兎角達而因幡江訴詔可申上と朝鮮人申候ハヽ、於因幡取上不被成候而者成間敷候、半兵衛儀諸事平馬江申談候様ニと被仰付、両人共ニ御次ニ退出、

304—2

△御次ニ而吉田平馬ニ様子半兵衛相尋候処、平馬申候ハ、隠岐国より朝鮮人十一人船一艘ニ乗、六月四日伯耆江着船仕候、内五人出家ニ而御座候、伯耆ニ差置候家老方より因幡江も早々申越候、御先代より、此方ニ而者何事も不取上、長崎御奉行所江遣候様ニと被仰付置候付、因幡江参り候ニ及不申候由申聞候得共、致立腹水干ニ而此方之者を打倒し我々斗先ニ参候、竹嶋ニ者朝鮮船三十艘余も参り居候由申候付、翌五日ニ朝鮮人因幡江遣し申候、拾一人之内先年竹嶋江参候朝鮮人アンヒチヤク諸事案内をも能存、大形日本言葉を申候、訴訟之儀者其元様之儀ニ而御座候様ニ聞へ申候、乍去加賀守様江者其元様之儀何角と申候とハ難申上候付、何事も言葉通し不申候由申上候、就夫加賀守様御意被成候ハ、筆談ニ而埒明可申儀候、筆談者不仕候哉と被仰候付、筆談を仕候而者訴訟之儀を受込候同前ニ御座候故筆談不仕候旨申上候、兎角其元様之儀何角と申候間因幡江通事侍衆を被遣可然奉存候、アンヒチヤクを先年竹島江参候節御国元朝鮮ニ而しはりなとハ不被成候哉、左様之事共申、兎角何角と其元様之事を申候由被申候付而、半兵衛申候者ハ、左様之儀者曽而不承候、今度之朝鮮人御領分江参り候次第并御先代異国船之儀ニ付被仰渡候御奉書御写被下候様ニと申入、夫より罷帰ル、

304—3

△同日、右之趣加賀守様被仰渡候為御請半兵衛儀加賀守様江致参上、近藤兵太夫江致面談、宗次郎申上候、先刻家来之者被召寄被仰聞候趣具ニ承知仕候、将又明八ツ時御宅江家来可差上旨奉得其意候、先刻被仰付候通事之儀、御当地・大坂・京都ニ差置候家来共之内吟味仕候得共朝鮮人通詞仕候者無御座候由申上候処、押付御返答ニ、先刻御家来召寄申進候儀ニ付被入御念候、御使者口上之趣致承知候、明日八ツ時又々御家来私宅江被遣候様ニと申進候段御聞届被成候由被仰下得貴意候、朝鮮人通詞仕候者御当地京大坂ニ而被差置候御家来之内ニ無御座候由被仰聞候、左候ハヽ御国元か長崎江被差置候通詞之者少も早く因

幡江被遣候御手寄之方江早々可被仰遣由加賀守被申候と被申聞候付、半兵衛申候ハ、委細奉畏候、次郎ニ具可申聞候、当分朝鮮御用之儀者刑部大輔ニ被仰付置候間、刑部大輔方江も可申越候、此段ハ御自分様江申入候、通事之者国元か長崎より因幡江直ニ遣し申候而者如何可有御座候哉、御当地江召寄差越申候而者日数延引可仕候、しかしなから御当地江召寄得と申聞せ候而差越不申候而者無覚束存候、兎角此段者追而伺可申上と申候得者、両様共ニ御尤ニ存候、委細者明日加賀守可被申談候由被申罷帰ル、

304—4

△松平伯耆守様御留守居吉田平馬方より来候書付左ニ記之、

覚

朝鮮人之船一艘五月廿日隠岐国江着岸、依之御代官後藤角右衛門儀手代中瀬弾右衛門・山本清右衛門より伯耆国役人共方江以飛札右朝鮮人伯耆国江願之儀有之罷越ニ付知せ申由申来候、此返事国元家老共より差遣候内ニ早朝鮮人伯耆国赤碕と申所江六月四日令着候、船中之人数十一人此内僧五人、先年従竹島連参長崎江送届候あんびちやんと申も参候、因幡国居城ニ候故、願之儀因幡国江参申度旨ニ而、右之朝鮮人翌五日因州青屋と申浦辺へ罷着候、尤此方番船差添申候、於因州役人共出合様子相尋候得共言語通し不申、願之様子相知不申候、先年被仰出候御奉書之趣も有之候付願之様子又者願書等此方江請込申儀も如何存、昨日右之段如何可仕哉と御老中様江相伺被申候、以上、

御奉書写

異国船領内之浦江令到来訴詔之儀於申者、船中之者気遣無之様ニ致挨拶置、長崎以奉行人可遂訴詔旨相含之、差副案内者彼地江可被越候、若在其所而訴詔仕度と申候ハヽ番之者付置之、其趣大坂定番衆・同町奉行・長崎奉行人并高力摂津守迄早々注進尤候、自然長崎江不相越又者湊江船を不入沖ニ有之而はし船を以於令申者湊江本船を不入慥成者をも不差越候候之間江戸へ可及注進様なく、其上当所にハ通事無之候、長崎江罷越儀不成候ハヽ可帰帆之旨含之、被相構間敷候、兎角日本江商船渡海訴詔候間、彼輩不気遣之様可被心得候、恐々謹言、

二月十二日　　阿部対馬守　主次在判
　　阿部豊後守　忠秋在判
　　松平伊代守　信綱在判

松平相模守殿

304—5

△同月廿四日、御留守居鈴木半兵衛大久保加賀守様江致参上、御取次鳥井雲八江致面談、次郎申上候、昨日家来之者一人差上候様ニと被仰聞候付則差越候由申達候処、松平伯耆守様御留守居吉田平馬并半兵衛儀加賀守様御前ニ被召出、御直ニ被仰渡候者、今度因幡へ朝鮮人参り願之儀ヲ因幡ニ而申し候得共、何レ之願ニ而も長崎江遣長崎奉行方ニ而被申付事ニ候間、此度も長崎へ遣彼地ニ而詮議可被申付候、其上ニ而も長崎江参間敷と申ニおゐてハ何方ニ而も取上不申候大法之旨申聞是非共ニ長崎江参間敷と申候ハヽ帰帆いたし候様ニ

可被申付旨伯耆守殿江も申渡候、其通りを御家来江も被仰付通事を可被差越候、委細者以書付申渡候由御意被成御書付一通御渡被成候、吉田平馬江も御書付一通御渡被成候、其節半兵衛申上候ハ、朝鮮御用之儀乍当分刑部大輔へ被仰付置候付昨今被仰付候趣、通詞之者之儀、刑部大輔方江申遣国元より直ニ因幡江差越可申候哉、通詞之者之儀ハ軽者ニ而御座候間侍向之者一両人相添差越可申候、御当地江通詞之者召寄候而者延引可仕と奉存候、将又朝鮮人長崎江被遣候ハヽ通詞之者彼地迄相添遣し可申候哉、此段次郎奉伺候由直ニ申上候処、被入御念儀ニ候、通詞之者対州より御当地江被召寄候而者可致延引候、対州より直ニ因幡江可被遣候、通事之者ハ軽者故侍向之者一両人御添被成度之由御尤存候、急度不仕候様ニ一人御添可被成候、長崎江朝鮮人参候ハヽ通詞彼地迄御添可被遣哉と被仰聞候、成程御添被遣可然候、船中ニ而伯耆守殿家来致通用度儀も可有御座候間、弥御添可被遣と被仰聞罷帰ル、

304—6

△御書付左ニ記之、

覚

去四日伯耆国赤碕江朝鮮人致着岸、因幡国江参度旨申ニ付差留申候得共承引不致、因州青屋と申浦辺ニ番人附置候、言語しかと通し不申候故願之子細不相知候由松平伯耆守より申聞候、其方家来遣し伯耆守家来申談いつれの願ニ而も長崎江遣し長崎奉行方ニ而全(ママ)議有之様ニ可被申付候、其上ニ而も長崎江参間敷由申にをひてハ外之所ニ而者取あけ不申大法之旨申含帰帆候様可相達由伯耆守方江申達候間、被存其趣、右之段家来江可被申付候、以上、

六月廿三日

304—7

△右書付御渡被成候為御請加賀守様江御使者白水杢兵衛被遣之、御口上ハ、今日家来之者被召寄御書付を以被仰付候趣委細令承知候、国元江申遣、通詞之者因幡国江差越候様ニ刑部大輔方江申遣候、右之御請為可申上以使者申入候と之御事、御返答者、今日御家来を招、書付を以申渡候通御聞届被成候付、被入御念被仰下之趣令承知候、重而懸御目可得御意と之御事也、

304—8

△今日半兵衛平馬江様子相尋候処、昨日申入候通別而相変儀無御座候而、書物なと二三通持居、公方様へ差上候書物或因幡領主江被差出候書物なとゝ申候へハ、夫共ニ何事も取上不申候由物語有之、

304—9

△加賀守様より被仰渡候趣口上書ニ仕、阿部豊後守様江大浦忠左衛門致持参、三沢吉左衛門江面談いたし、差出之、

覚

昨廿三日大久保加賀守様江留守居之者被召寄被仰付候者、去ル四日伯耆国赤碕江朝鮮人拾壱人乗一艘致着岸、訴詔之儀候間因幡国江参度旨申候ニ付差留候処承引不仕、因州青屋浦ニ致着船候得共、言語通し不申候間因幡国江差越候様、委細者今日以御書付可被仰付候間留守居之者差出し候様被仰付候故御差図之通今日差出候処、右之趣御書付を以被仰付候、御当地江者通詞之者居不申候間、国元刑部大輔方江申越通詞之者差越可申之旨申上候処、弥国元江申越、直にニ因幡国江差越候様ニと之御事御座候故、則国元江申越候、此段可申上之旨次郎申付候、以上、

六月廿四日　　宗次郎内　大浦忠左衛門

304—10

△右之趣口上ニ而も申上候処、御返答ニ、因幡国江朝鮮人致着船候処、言語通し不申候付通詞之者差越候様ニと、加賀守様より被仰渡候付被仰聞候趣委細致承知、被入御念儀ニ御座候、弥御国江被仰遣通事之者早々因幡江可被差越候、右朝鮮人願之儀其所ニ而御取上被成候而ハ以来ヶ様之儀絶申間敷候間、随分なため候而長崎江参候様ニ申聞、其上ニも承引不仕候ハヽ其所より直ニ帰帆可仕旨申渡候様ニ因幡江被差越候通事之者并侍へも能々被仰含被差越候様ニと之御事ニ候、罷帰、右侍被差副候儀と忠左衛門口上ニ而申上候付、右之通御返答被成、

304—11

△右之節三沢吉左衛門迄忠左衛門申入候ハ、今度伯耆国江罷渡候朝鮮人之内先年竹嶋ニ而捕対馬守方江御渡被成候両人之内壱人此度も罷渡候由風説及承候、先達而竹島之儀刑部大輔江被仰付候得共、訳官ニ不申渡内彼国出帆仕罷渡候歟と奉存候、左候得者竹嶋之儀御訴詔申上候哉と邪推ニ奉存候、其わけハ先年竹島ニ而捕候両人之朝鮮人因幡之府ニ而御馳走等被仰付候処、対馬守方江御渡被成候以後、最前も申上候通警固等も常より者急度申付候故、因幡府を江戸と存朝鮮国江罷帰、上ニ者左程無之儀を対馬守中ニ而取はからひ候様に風聞仕候由及承候、依之此度直ニ因幡国江罷越御訴詔可申上と存候哉と推察仕候由申入候処、吉左衛門も定而左様之儀ニ而可有御座と存候、右之趣も為御念候間豊後守江可申聞置候由被申候也、

304—12

△同日松平伯耆守様より以御使者申参候者、拙子領分江朝鮮人致着船候付、御老中迄遂案内候処長崎江送届候様ニと被仰渡候、其元様江も通詞之者国元江被差越候様ニ被仰渡候由承候、諸事家来之者江被申談候様ニ御家来江被仰付可被下候、此段為可申入以使者申入候と之御事ニ付、此方よりも御使者鈴木左治右衛門を以御返答被仰遣候也、

304—13

△同月廿五日、長崎御奉行諏訪兵部様ニ御留守居鈴木半兵衛を以左之御口上書被遣之、

口上之覚

朝鮮人十一人船一艘ニ乗六月四日伯耆国江罷渡、翌五日因幡国江着船仕候処、言語通し

不申候ニ付、其旨領主松平伯耆守殿より御老中迄被遂案内候処、通詞之者因幡国江差越候様ニと御月番大久保加賀守殿より昨日被押渡候付、国元同姓刑部大輔方へ通事之者早々因幡江差越候様ニと申遣候、右之段為御案内以使者申入候、以上

六月廿五日　　宗次郎

右御口上書被遣候所、御返答ニ、御使者御口上之趣致承知、被入御念儀候、重而相変わ儀も候ハヽ可被仰聞候、伯耆守殿よりも被仰越承之候と之儀也、

304—14

△大久保加賀守様より松平伯耆守様江御渡被成候御書付写左ニ記之、

覚

去ル四日伯耆国赤碕江着岸候朝鮮人、因幡国江参度旨申ニ付差留候得共承引不仕、依之因州青屋と申浦辺ニ番人被付置候、言語しかと通し不申候故願之子細不相知候由、令承知候、宗次郎方より家来可差越候間、其方家来相談いたしいつれの願ニ而も長崎江罷越長崎奉行江相達候様可被申付候、其上にても長崎江参間敷旨申にをひてハ外之所にてハ取あけ不申大法之旨申含帰帆候様可相達由可被申付候、以上、

六月廿三日

305

○同九年七月七日、江戸表より飛脚到来、去ル六月朝鮮人因幡江罷渡り候付、従此方通詞之者被差越候様ニと之儀、大久保加賀守様より被仰渡候旨申来候付、因幡江之御使者鈴木権平并真文役阿比留惣兵衛・通詞諸岡助左衛門・加勢藤五郎被仰付、江戸表江之御使者賀嶋権八被差越、天龍院公思召之趣被仰含、於江戸在番之家老中より阿部豊後守様江相伺候様ニと被仰遣也、

305—1

△鈴木権平因州江罷越候付、組之者三人付・足軽二人相付被差越、

305—2

△権平・惣兵衛并通詞出船之刻、平田直右衛門申渡次第六ヶ条左ニ記之、

305—3

△今度因州江朝鮮人渡海、公儀江訴詔申上儀有之由申候、依之従公儀通詞之者差越候様ニと被仰付、加勢藤五郎・諸岡助左衛門被仰付被差越候付、権平儀通詞下知被仰付候、彼地被罷越候共、江戸表平田隼人・大浦忠左衛門方より委細之書状不相達内者、仮令彼国之役人衆朝鮮人江対談仕候様ニと被申掛候共、右之趣申断、対談無用ニ可被仕候、江戸表より差図有之候書付之通ニ仕候様ニと申儀、将又竹嶋之儀抔彼国役人相尋候共不存由申、決而左様之咄等不仕候様ニ可被相心得旨、是又申渡之

・朝鮮人長崎江被送遣候儀も可有之候、因幡より之御使者同前其節者可被罷越と存候、

先年従彼地被送遣候ことく道中ニ而自由かましき事共不為申急度可被申付候、毎日日本定たる里程ニ道中可被為致候、

・因州へ被罷越候節暫逗留も可有之哉と存候、弥其通ニ候ハヽ因幡役人衆江申達、町屋ニ可被居候、乍其上客屋江被召置候者其時之様子次第可被仕候、

・朝鮮人長崎江被送遣候節、此方之者共江道中人馬旅籠銭等之御馳走抔被仰付候ハヽ達而御断被申上、手前より駄賃旅籠銭等無滞相払候様可被仕候、

・備前岡山より因州江被罷越候節并彼津江着船之刻、御城下之儀ニ候間諸事気を付候様可被仕候、

・朝鮮人直様此方江請取候様ニと被仰付儀も可有之候、其節者無油断諸事念を入候様可被致候、

305—4

△賀島権八儀、船中十日切道中六日早追を以被差登、七月十日御国出帆、同月廿九日江戸参着、

305—5

△権八江御渡シ被成江戸表家老中江被仰遣候天龍院公思召之御書付、左ニ記之、

一今度如何様之訴詔申上候と御存不被成候得共、因州江志シ候而渡海仕、其上先年竹嶋江参候アンヒチャクと申者も乗り罷渡候由ニ候故、定而竹嶋之訴詔にても可有之哉、然者公儀ニも結構ニ御了簡被遊朝鮮国之為ニも宜様被仰付候処ニ未申渡候内右之訴詔之様子御聞届被成候而者、彼方ニ者訴詔申上候故御聞分被成候而如此被仰付候と可存候、左候而者以来共ニ少之儀ニ而も直ニ訴詔可仕と申候而者公儀ニも御六ヶ敷事度々可被聞召上候、殊刑部大輔江役儀被仰付置候規模も無之候故、願者如何様之訴詔にても日本国と朝鮮国とハ古来より契約有之而何事ニ而も対州より取次不申候而者御聞届不被成筈ニ候故、何方ニ罷越候而も御取上不被成候間、急度帰国仕、弥不申上候而不叶事ニ候ハヽ何ヶ度も刑部大輔を以可申上之旨被仰付御還シ被成候ハヽ、其内ニ者訳官も渡海可仕候間刑部大輔江兼而被仰付候趣可申渡候、左候而者訴詔御聞不被成前廉ニ被仰付置候段慥ニ相知候而、以来迄之為ニ可然と奉存候、若訴詔之様子被聞召候而者前以刑部大輔江被仰付置候とハ不存、今度朝鮮人差渡直ニ訴詔仕候故事六ヶ敷罷成候と被思召上、願之通ニ被仰付候と彼国江可存候、左候而者如何ニ奉存候故、此段存寄申上候由可然と被思召上候、

一今度之訴詔之儀如何様之儀願申事ニ候哉不相知候故、右之思召寄被仰遣候段御遠慮も可有之事ニ候得共、唯今竹嶋之出入未相済不申候故、竹嶋之事ニ而も可有御座哉と被思召上候故被仰進候間此段能被相心得、宜様ニ可被申上候、已来共ニヶ様ニ候而者御役目も御勤難被成儀ニ候間、此段者何とそ此方思召之通ニ被仰付候得かしと被思召上御事候、

一右之思召寄被仰遣候故、通詞之者因州江参着候共、江戸表各方より一左右有之迄者朝鮮人ニ対談不仕候様ニ申付遣之候間、若右之通相済候ハヽ弥以之儀ニ候、乍然因州ニ而成共長崎ニ而成共訴詔之趣御聞届被成候筈ニ相済候共、兎角江戸より之御左右承、任差図朝鮮人江相対仕候様ニ申付候間、左様ニ御心得可被成候、

一右之趣被申上候而も此方思召寄之通ニハ難成事ニ候間、弥長崎江被送遣筈ニ御差図被成候と之御事ニ候ハヽ、各より伯耆守様衆江被頼、鈴木権平方江書状差越候而朝鮮人対談仕、通詞と御用相達候様ニと可被申越候、夫迄ハ伯耆守様衆江御断申候而対談不仕候様ニ通詞共ニ申付差越候、

一此方より被仰遣候通ニ者難被成事ニ而、兎角訴詔之様子於長崎御聞被成候上ニ而者、兼而被仰付置候趣被仰渡候共、前以之御了簡とハ不存、訴詔仕候故願之通相叶候と存候而者以来共ニ大切ニ被思召上候、只今迄さへ竹嶋之儀公儀之思召と左程ニ無之候得とも、御国之御働ニ可被成と思召御一分之御了簡を以如此被仰掛候と存罷在候故、直ニ訴詔仕候付被聞召分相叶候と存候而者已来共ニ御役儀御勤難被成事ニ候、若訴詔之事弥竹嶋之儀ニ而公儀江も御聞被成首尾ニ候ハヽ何とそ右ニ被仰付候趣とハ模様も違候様被成度事ニ被思召上候、其子細者重畳結構ニ御了簡被遊朝鮮国之為ニも宜敷様ニ御隠居様江被仰付候処、未其段被仰渡も無之落着之様子をも不承届候而御役目を差置古法を破直訴仕候段不届成仕形候、畢竟直ニ訴詔さへいたし候得者結構ニ被仰付候と存候而者已来之儀如何被思召上候、今度直訴いたし候付公儀向ニも右之御心入とハ振替り首尾悪敷罷成候、と彼方ニも及承候様ニ御座候得者御役目之為ニ已後共ニ被成能事候、是ハ難被仰上事ニ候得共、吉左衛門迄忠左衛門物語之様ニ被申達、吉左衛門自分之存寄之様ニ成共被申上候而、以来御役儀御勤被成能様ニ御了簡有之候様可被頼候、

一長崎江送遣候共此方江送遣候共、法を破他国江罷渡りたる者ニ候間、御馳走等結構ニ被仰付候而者弥朝鮮人存入も已来悪敷可罷成候、先年被捕置候者共も結構ニ御馳走被仰付候処、此方江被請取被成候已後者人質之様ニ被成候故くい違出来候而、于今至而事之障りニ罷成候間、訴詔ニ罷越候者共之御馳走被仰付様可有之事ニ存候間、そと吉左衛門迄可被申達候、

一若ハ御隠居様被成様悪敷儀なと訴詔仕候とても輪番之和尚衆御目代之様ニ被差下置候故、両国通用之儀者和尚衆見分之事ニ候故、私ニ被差留候事決而不罷成儀候、此段者兼而御存被遊たる事ニ者候得共御失念も可有之候間、両国之間ニ私不罷成段者幾度も被申上置可然存候、

一朝鮮人共因州より直ニ御帰シ被成候事ハ如何ニ候故、訴詔之様子御聞不被成候而者御帰シ難被成と之思召ニ候ハヽ刑部大輔方江直様御渡シ被成、訴詔之趣承届、取次申候様ニ被仰付候得者責而御役儀之詮も立宜敷御座候間、此段能々可被申上候、乍然願くハ直被差帰候様被成度被思召上候間、左様ニ可被相心得候、

一朝鮮通交之儀者古来より両国契約有之而、銅印を差渡置、此印契無之船者彼国江請入レ不申候、彼国より日本江通用之儀者此方御家ニ申達候而通交仕り、他国江直ニ通用仕間敷旨古来より申合有之事ニ候、依之他国江参候而訴江仕候儀先例無之儀ニ候、御役儀之所江不相届差越候而直ニ訴仕候事今度何方ニ而成共御取次被成御聞届被遊候得ハ已来迄之定例ニも成可申候哉、別而大切ニ被思召上候、此節之儀者兎も角もニ而候得共、已来之為ニ候故被仰遣候間、此段も吉左衛門迄物語可被仕候、右之趣各御存之儀ニ候得共、愈為念如此候、

一今度訴詔申上候趣公儀江御聞被成候様ニ御座候而者訴詔之品ニより公儀より御返答被遊にくき儀も有之候而、事ニより大切ニ罷成候首尾も可有御座哉と被思召上候、

一今度被仰遣候内段々思召寄之次第有之候ニ付左ニ書付申候、第一者取次之役目、人を

差置他国江参訴詔仕候而者決而御取上不被成御国法ニ而候故被差帰候と之御事ニ而、因州より直ニ御帰シ被成、是非共ニ御役目を差置候而之訴詔者御聞不被遊候法ニ候旨、急度被仰付被差帰候事以来迄之御為ニ宜敷御座候、第二ニ者其所より直ニ被差帰候事不罷成候ハヽ朝鮮国漂船之定例之通長崎御奉行所江被送遣、彼所より此方江御渡被成、法を破罷渡候故訴詔之趣者善悪ニよらす御取上無之と被仰付被送帰候段第二ニ而候、第三ニ者今度罷渡候訴詔之意趣御聞届無之御帰シ被成候事も難成候故、様子御聞可被成と之御事ニ候者、御隠居様御役之儀ニ候故長崎御奉行所より此方江御渡被成、此方ニ而以酊庵御同前ニ訴詔之趣御聞被成、公儀江被仰上候様被成度候、長崎江被送遣、彼所ニ而意趣御聞届被成候儀者異国船之御法にて候、朝鮮国も異国ニ而者候得共根本由緒有之而対州一手より日本通用仕事ニ候得者、異国ハ乍同事朝鮮之事ハ古来之次第格別之事ニ候故、他江御取次被仰付筈ニ而無之と被思召上候、兎角今度訴詔公儀江直ニ御聞届不被遊候儀已来之御為ニ能御座候、若御聞被成首尾ニ而候ハヽ他所より御取次被成候而者御役之詮曽而無之、向後御役儀御勤難被遊事ニ被思召上候、書中委細ニ申度存重言も有之候得者御了簡尤ニ候、

一今度因州江罷渡候朝鮮人之儀付而御隠居様思召寄委細被仰遣候、此趣得と吉左衛門江口上ニ而可被申達候、自然御口上書ニ而差出可然と被申儀も可有之哉、尤従爰元御口上書之御案文可被差越候得共、其御地之御様子如何可有御座候哉御斗難被成候、弥御口上書ニ而被差出筈ニ御座候ハヽ吉左衛門ニ具ニ被申談、爰元より被仰遣候次第能致得心候而案文吉左衛門江被得差図宜敷様ニ相認可被差出候、御紙面御主意相違無之様ニ可被相心得候、

一訳官早々罷渡候筈ニ被仰遣候得共、彼国之事候故延々ニ罷成、漸八月ニ渡海之筈ニ御座候、今度訴詔之品ニより兼而被仰付置候趣と被仰渡之様子違申儀も可有御座候哉と被思召上候間、訳官渡海仕候而も此御返答到来迄者先被仰渡候儀可被差扣候間、左様ニ被相心得、否之儀相知次第早々可被申越候、

一今度阿部豊後守様江御自筆之御状被進候、則御案文相副遣候間御披見被成、弥被差出候而可然儀ニ候ハヽ可被差出候、

七月八日

杉村三郎左衛門
田島十郎兵衛
平田直右衛門
多田與左衛門
樋口孫左衛門
杉村采女

平田隼人殿
大浦忠左衛門殿